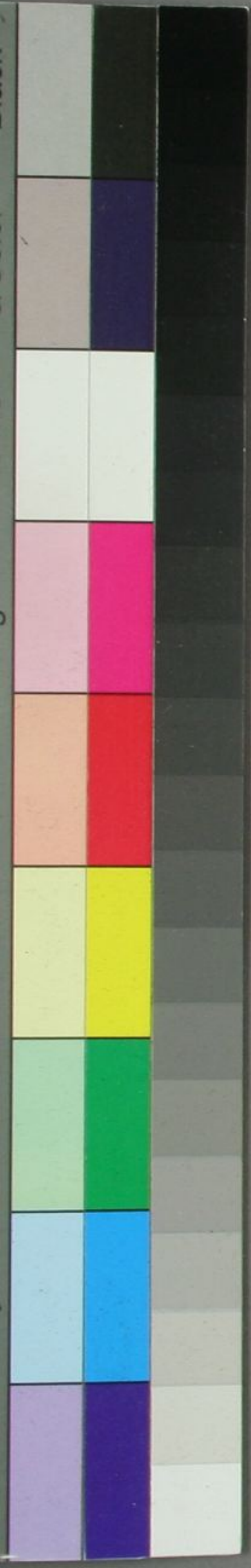


時宗遊行流之記

特
八波4
1380



八
1380

八

八

時宗遊行泚之閑山一逼上人氏者河野
玉名伴豫國之太守河野七郎通廣之子也

建長年中自七歲之時有法師之志

登天台宗德智山十三之歲通廣頻

達剃髮染衣之望号戒名於隨緣自

是叡山學席入通達天台之一心三觀

繫緣法界一念法界之觀解微見一代

藏經三返衆呼名隨緣大阿闍梨法印

聰明智辯賢ニル二頭猶如星中之月巖然
元來不事名譽留眼於出堆生死殊見
淨土宗之二部注善道寸之疏叙易住
易修之判叙圓頓速疾之妙行者理深
解カ微故敬亂鹿動之凡夫通入難成旨
與止觀二之卷諸效所讚多在彌陀之文
理符合故於念佛門不審カ諸淨土宗
法然上人之上足西山之室而學于洋家

十有餘年終領解他力本願之深旨三
十五之歲後宇多院建治二年之夏參
詣江州熊野而於本宮證誠殿百目籠
居自他成佛二世成就之祈願シテ權現之
奇瑞示現新蒙授受定住王南無阿
彌陀佛之筭此時名法名一遍上人自然
國々修行焉又於大隅正八幡宮勤修
念佛法樂神託有而愈一切衆生之

往生者爰歸念佛門踊躍歡喜之念
佛一主堅固勤ユイ於テ攝津國兵庫浦真
光寺正應二年八月廿三日正年五十一歲
而寂滅也シユラシ

遊行二代他阿上人氏者久我七清華之
子也不宗者洋土而智道兼備之僧
而一適上人歸伏相續遊行之法流國々
修行伊勢桑宮之砌有大神宮之奇

瑞而於内外兩宮之神前修踊躍念佛
又江州多賀大明神不思議之靈夢有
而明神之御神体号壽阿彌陀佛奉
納内陣宮之閑扉一七日之法樂之念
佛修行シユラ爰依之而遊行代々江州修行
之節者閑帳法事而從不動院一日之
中モテ饗應上人并大衆也又越前敦賀
氣比大明神往昔者荒濱船之洎難

成上人筑濱入津自在故于今遊行
代々此處修行之時臨時破持之祭禮
有之始上人入衆并町百姓俱任旧例
破持之祭也又於伊豆國三嶋明神有
旧例代々法樂之念佛於神前而有之
又於信州善光寺念佛法事又於戶隱
明神新有示現而于今代々參詣
諸國之靈佛具社之奇端多端也太

見傳記也閑帳法事如先規

遊行七代上人九羽修行之時惡風俄吹
船無何國馳走特上人六字之名号書
銘文張帆柱者忽成順風松浦沖着船
從龍宮現星硯荒和布取子捧上人
受算名号無難松浦濱上自此
特船之守遊行出之也

遊行十二代上人者太皇宮太子而

南帝方之系圖卷物等留遊行真
宗門之官職愈高上也故至國々在々
處々輿車驛馬人安之院宣從此人
時始生

遊行十四代上人之特寧盛遊行柳之
利益如世上流布之註

遊行十六代者御當家御先祖

松平太郎九衛門殿御師靴而由緒別記

之

遊行三十二代上人者佐竹殿伯父而於

水戸建道場與藤沢希持等權規公

共御親切也

遊行代々俗姓之系譜有之於國々不思

議數多雖有之恐繁而省畧之

和慶子圖

時宗多事帶佛地丸山雲山
所居婦妻稱保保其髮皆
有以上切指而結甚異家也
如有姪者臨月出千里產但
不許嗣父母後養他子
相續也每臘月未至元日
十日精進浴六垢盡六時執行
以為三年以減罪之法

時宗汎六時勤行之次第

晨朝 卯之時

念佛廻向 阿彌陀經 晨朝偈

歸三寶 廣懺悔 無常偈

發願 和讚 稱名念佛

阿彌陀經 十四行偈 恩德讚偈



日中 午之時

阿彌陀經 日中偈 歸三寶

無常偈 發願 和護

來迎護 踊躍念佛 稱名和護

迴向護

日沒 申之時

阿彌陀經 日沒偈 歸三寶

十二禮

無常偈 發願 和護

念佛迴向

初夜 戌之時

阿彌陀經 初夜偈 皈三寶

無常偈 發願 和護

念佛 恩德護 迴向

中夜 子之時

阿彌陀經 中夜偈 略懺悔

無常偈

發願

和護

念佛迴向

後夜

寅之時

阿彌陀經

後夜偈

畧懺悔

無常偈

發願

和護

念佛迴向

右之通不斷、勤行法事時、

頻字施餓鬼三部妙典之讀經別時念佛亦

時宗小遊行流傳子位階并法衣

為用之

一本寺初合寺之法攝十一年已上、

西寺、一年載五脈、二年傳史、三年為

智、四年為長、五年有住、六年教、七年、

持、八年、九年、十年、十一年、十二年、

聖、十三年、十四年、十五年、十六年、十七年、

宗、十八年、十九年、二十年、二十一年、二十二年、

辨龍教及載法香衣之用法也
常衣之爲是也加衲衣衣之用法也
しん平使も光爲は 衲衣の是衣衣
志爲は是も名用はしん

一遊河所修子者淨土之教也 淨土
性生偏つ處所依淨土八祖釋義
兼中々天名真名之禪津等之強款寫
並修子之爲有らるる也

一宗門五教神道也傳はるる也

然野之社行現正八極宮分幸瑞依
多之修り之是也と勸請尸現高二世
之祈り法も依之未等方之祈禱也

一遊河所修子者淨土之教也

清華家也しんは是也十二代上之は
南音乃之子也源氏方今也此の是
之今も代は是也修り也

尾川海東那蓋村傍南光寺

抑當寺の創基は住持あるに由りて

蓋子乃寺として時々住持出津師

不智道兼備乃被傳ふり、筆殺禁持戒

の卷の身も小の僧の〇く又道活男女を

多し、凡六八十具に戒を授て今も住持

勝く行愈つる僧は小遊り、其も一遍上人

四國巡りあり、其も國甚目寺小

念伴弘誓を袖先結ひはる小千特
蓋母れ若くも家へ等あす下分りて
聖夢とさるゝして卒矣の思はぬ

去物おぼけにて後想のくさくさ
くゆるしていと化彼とよむ蓋津人
宿の津流小おのく結衣一とらん
信くはれし上人熟愛くく道守小
越く然即神物の靈美を幾くは他

胸躍の念佛とらんく波津師り
告給ひけり津師懸河入糸を振ひ
美天宗宗津小れ能はくして圓頓
迷疾の妙法は毎相定念の真つと離
寂光あんや何ぞ操とといひて浄土
弘誓の舟とての波く真実く比授小
及りぬくして疑滞と奉くく如佛執行
を非じ去りて名れらる教訓と福と

とくも上人の論議は仏の三戒道場
證阿からきて後小律師卷に古
字に一より歸依して也 中宗と
改つて弟れは二より三よりと
きふらして上人は宗より梵河入を
授け牌ときて常寺の宗山と
も又四の法也と先一はくは
おわくは律師の宗と上人と
は

他河止人 是と西の 河属 や 河跡

出補 ひ げ年 中 橋南 山 調聲 寺

山 の 方 に とも ら 橋 取 石 捨 け

光明 り 撒 て 光 明 寺 と 名 く 是 の

日 と 家 の 山 と 寺 の 經 系 名 と

境 の 橋 の 河 の 山 の 寺 と 名 と

く は 寺 と 名 と 寺 と 名 と

く は 寺 と 名 と 寺 と 名 と

此祭会七十二坊普瓦と句一坊を備
城外の人伽藍一坊也水氷
集七十の英文也と云々記して人元
衣洲の御程小寺のその後 大田
秀吉公法國王正年中由る飲一
くとも此等此言構坊会御一城元
小及て唯小寺の御程第一と云々
況寛永十二年九月夜半の急方

既小寺一と云々原程御座る物也
御座る御座る御座る御座る
燻一坊と云々御座る御座る
大寺一坊と云々御座る御座る
色本寺御座る御座る御座る御座る
此古記各と云々御座る御座る
正和二年正月廿五日小寺御座る
と云々御座る御座る御座る御座る

高寺の鎮守の宮別家志

くふ日月及び神名ふかやう尾川

乃國守代法所山内之宮鎮守の

武衛公織田本和寺信長公護書

家行行徳一連歌れ合を奥

行と日れ本の日の也田ていふ事知るはは

此の孫の驛とりて士人の筆目で

外寺林り市とあらふこの事也乎

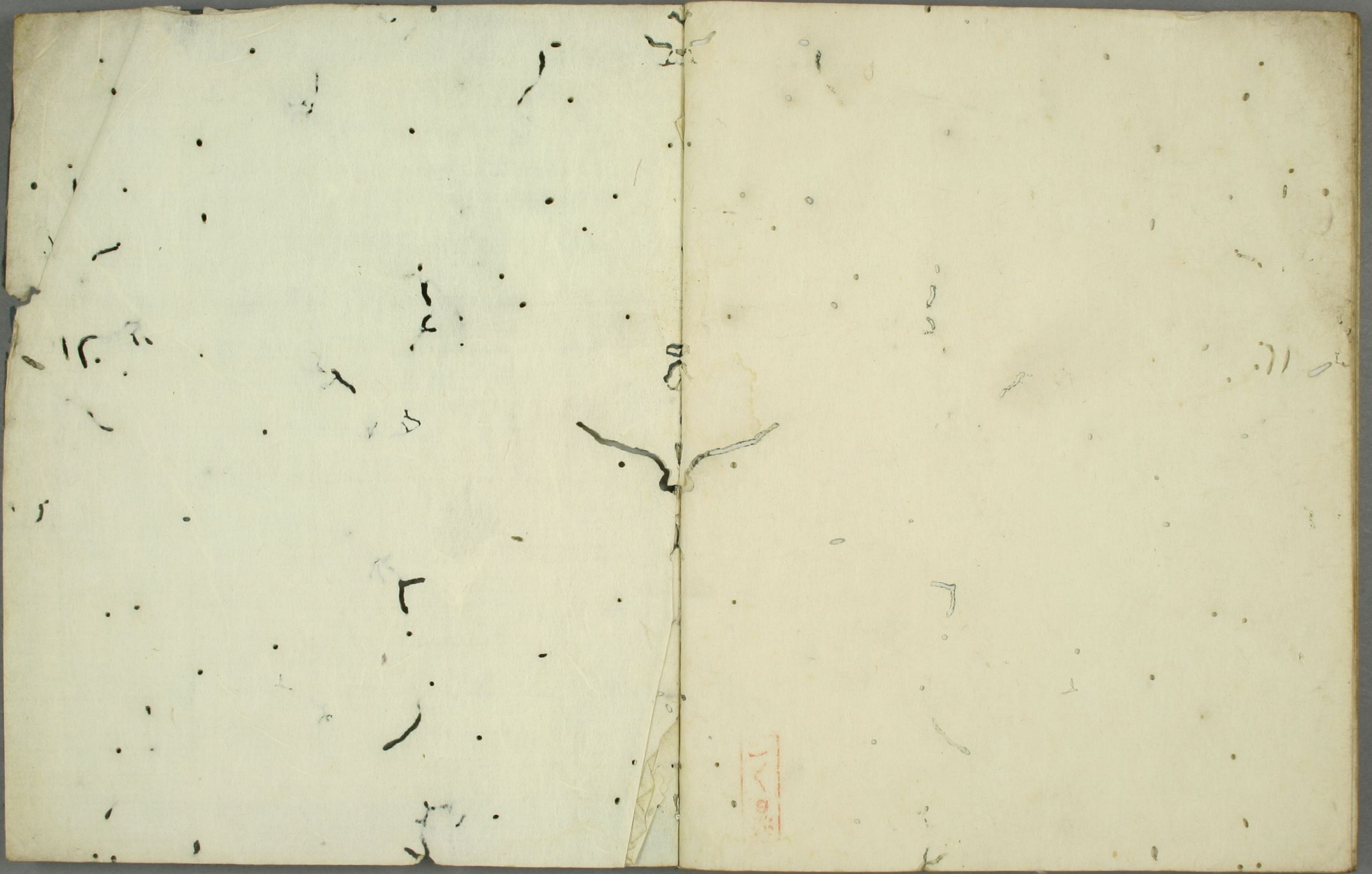
一と提とやこの事未入縁起村先

れ得名多一一一一今一也也

跡とたつの実深と一一一一也乎

云亦





170

170

170

170

170

170

170

170

170

170

170

170

